

# 虚構移動表現と主体化

武本雅嗣 (山口大学)

動物は物理的世界から、ある一定の範囲の刺激だけを、それぞれの種に備わった感覚器を通して受け取っている。ヒトの場合は外界の情報をかなりの程度視覚によって得ているが、その情報処理能力は鳥類などよりもはるかに低いと考えられている。たとえば、実際は点的な物体であっても、目の前を高速で動くと、我々はそれを線状のものと見てしまう。次のような言語表現には、このようなヒトとしての主観的な視覚認知、平たく言えば「見え」が反映している。

(1) 一筋の雨

(2) La voiture a **filé** en brûlant un feu rouge. (車は赤信号を無視して突っ走った)

また、次のような表現からは、人間の抽象的な事態の捉え方が空間認知に基づいていることが見て取れる。次の(3)の表す事態では、(2)の場合とは違って、その主語の指示対象は現実には移動しているわけではない。

(3) Son entreprise **court** à la faillite.

(彼の会社は倒産へと向かっている [倒産しかかっている])

この動詞が表しているのは位置変化ではなく、「状態は場所である」「状態変化は移動である」というメタファーを介して拡張した意味すなわち状態変化である。

このように比喩的用法の移動(様態)動詞は物理的な移動を表さないわけであるが、比喩表現とは別に、日常言語には、非科学的・非現実的と思われるような移動(様態)動詞を用いた言い回しが非常に多い。

(4) a. Ce train **va** à Lyon. (この列車はリヨンへ行く)

b. Cette route **va** à Lyon. (この道路はリヨンまで続いている)

(5) The fence **goes** from the plateau to the valley. (Talmy 2000)

(フェンスは高原から低地まで続いている)

いずれの文でも典型的な移動動詞が使われているが、(4a)の主語の指示対象は物理的に移動するのに対して、(4b)および(5)の主語の指示対象は静的な存在なので、それ自体が移動することはまったくない。このような場合に移動動詞が用いられるのはその動詞に「続いている」という意味が登録されているからで、(4b)や(5)は単なる慣用表現にすぎないという見方もあろう。しかしながら、範囲占有経路表現には何らかの移動(経路上の「実際の移動」や「仮想の移動」や「視線の移動」)が関与している。この種の現実には起こっていない移動を、Talmy(1996, 2000a)らは *fictive motion* 呼び、Matsumoto(1996a, 1996b, 1996c)らは *subjective motion* と呼んでいる。またLangacker(1990a, 1998, 1999)は、そこに *subjectification* (主体化)がかかわっているとみなしている。

虚構移動表現あるいは主観的移動表現の分析は十数年前に英語と日本語において活発に行われ始めたが、近年はいろいろな言語でも観察されるようになってきた。フランス語の例としては、他に次のような他動詞や代名動詞が用いられた文も虚構移動表現として挙げることができる。

(6) Un pont de bois **traverse** la rivière. (木造の橋が川に架かっている)

(7) Une vaste plaine **s'étendait** devant nous. (我々の前に広大な平原が広がっていた)

(8) Le sentier **prolonge** la route. (小道は道路に続いている)

本発表では、先行研究を簡単に紹介したうえで、Matsumoto(1996a, 1996b, 1996c)および松本(1997)が指摘している虚構移動表現における様態に関する制約がフランス語にも適用されるかどうかを検証する。

(9) Le sentier { **passe / court / \*marche / chemine** } le long de la rivière. (小道が川沿いを走っている)

さらに、ドイツ語と中国語の例を挙げて、なぜ基本的な意味で対応する移動様態動詞が言語によって虚構移動表現で用いられたり用いられなかったりするののかという問題についても、少し踏み込んで見解を示したい。

(10) Der Weg { **geht** / **läuft** } durch den Wald. (道は森の中を走っている)  
walks runs

[参考文献]

- Langacker, Ronald. 1990a. "Subjectification", *Cognitive Linguistics* 1 (1), 5-38.
- Langacker, Ronald W. 1990b: *Concept, image and symbol: the cognitive basis of grammar*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1998. "On Subjectification and Grammaticalization", in *Discourse and Cognition: Bridging the Gap*, Jean-Pierre Koenig (éd.), CSLI publications, 71-89.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Matsumoto, Yo. 1996a. "Subjective motion and English and Japanese verbs" *Cognitive Linguistics*, Vol. 7, No. 2, 124-156.
- Matsumoto, Yo. 1996b. "How abstract is subjective motion? A comparison of access path expressions and coverage path expressions", In Adele Goldberg (ed.), *Conceptual Structure, Discourse, and Language*, 359-373, Stanford: CSLI Publications.
- Matsumoto, Yo. 1996c. "Subjective-change expressions in Japanese and their cognitive and linguistic bases", In Eve Sweetser & Gilles Fauconnier (eds.), *Spaces, Worlds, and Grammar*, 124-156. Chicago: The University of Chicago Press.
- 松本 曜. 1997. 「空間移動の言語表現とその拡張」, 田中茂範・松本曜, 『日英語比較選書 6 : 空間と移動の表現』, 126-229, 研究社出版.
- 松本 曜. 2004. 「日本語の視覚表現における虚構移動」, 『日本語文法』, 4(1), 111-128.
- Talmy, Leonard. 1996. "Fictive motion in language and "caption"", In Bloom, Paul, Mary A. Peterson, Lynn Nadel, and Merrill F. Garrett (eds.), *Language and Space*, 211-276, Cambridge: MIT Press.
- Talmy, Leonard. 1999. "The windowing of attention in language", In Shibatani, Masayoshi and Sandra A. Thompson (eds.), *Grammatical Construction: Their Form and Meaning*, 235-287. Oxford: Oxford University Press.
- Talmy, Leonard. 2000a. *Toward a Cognitive Semantics Vol. 1: Concept Structuring Systems*, Cambridge: MIT Press.
- Talmy, Leonard. 2000b. *Toward a Cognitive Semantics Vol. 2: Typology and Process in Concept Structuring*, Cambridge: MIT Press.